

平成 17 年 3 月 15 日から 2 ヶ月間、そして平成 18 年 2 月 12 日から 1 ヶ月間の 2 回にわたり、ニューヨーク大学神経科学センター (Center for Neural Science, CNS) の Chiye Aoki 先生と共同研究を行う目的で渡米した。Aoki 先生の研究室では免疫電子顕微鏡法を学び、アクチン結合タンパク質ドレブリンのトランスジェニックマウス脳の超微細構造の解析を行った。具体的には、2 種類の pre-embedding 法 (SIG 法、HRP-DAB 法) による 2 重染色、また pre-embedding 法と post-embedding(PEG)法による 2 重染色を習得した。これによって、2 種類のタンパク質のスパイン内局在を同時に観察することが可能になった。この共同研究で得たデータは 2005 年日本神経科学大会 (横浜)、2005 年北米神経科学学会 (ワシントン DC) でポスター発表した。現在はこれまでの結果をまとめ、論文を作成している途中である。

研究の成果だけでなく、多くの女性研究者とふれあう機会がもてたことも私にはとても意義のある経験だった。これまで私のまわりには女性研究者が少なかったせいか、将来結婚して子供を産んでも研究者を続けていけるのか不安に思っていた。日本にも家庭と研究を両立させている女性研究者の方は多くいることは分かっていたが、そんな自分の姿は全く想像がつかなかった。CNS には女性研究者が多く、子供のいる人も少なくなかった。実際、Aoki 先生は二人の小学生のお子さんがあるが、朝夕子供たちの送り迎えをし、子供の宿題を見、大学の講義をし、グラントを書き、時間があるときは自ら電子顕微鏡を覗いている。また、同世代の女性大学院生とも将来について話をする機会もあったが、彼女らにとって家庭と研究の両立はごく当たり前の将来のビジョンであるらしかった。そんな彼女らと過ごすうちに、家庭と研究の両立もそれほど身構えることではないのかもしれない、と思えるようになった (もちろんベビーシッターやパートナーの協力も必要であるし、本人の意思の強さもあるだろう)。

今回、国際共同研究で学んだ多くのことをこれからの研究生活に活かしていきたいと思う。